

序

昭和27年に奈良国立文化財研究所が発足し、昨年で30周年を迎えた。研究所創設当時の奈良は、現在からは想像もつかないのどかな田園風景に囲まれ、まさしく文化財の宝庫にふさわしい環境のもとにあった。しかし近年の開発の波はこの奈良の地にも押しよせ、長年保たれてきた古都奈良の景観を徐々に変えつつある。こうした奈良の変貌にともない、平城京内の発掘調査件数も年毎に増加の一途を辿っており、当研究所もその調査研究に追われているのが現状である。

今回発掘調査をおこなった奈良市三条宮前町周辺は、奈良市街地の拡大にともない特に開発の進行した地域であり、また平城京内でも発掘調査の手が及んでいない未知の一画であった。この地は奇しくも昭和54年に旧添上郡田原の里で発見された太安萬侶の墓誌に記された平城京左京四条四坊にあたり、一躍世間の注目を集めた地域でもある。このたび白藤学園の校舎改築に際し、学校法人白藤学園及び施工者株式会社浅川組の御協力のもとに、当研究所が事前に発掘調査を実施する運びとなった。

調査の結果得られた成果は本書に詳しく述べられているが、多くの遺構とともに羊をかたどった形象硯、銭差にさし貫いた状態の和同開珎など予想外の貴重な遺物を発見し、左京四条四坊における土地利用状況の一端を明らかにすることができた。今回発見された遺構が太安萬侶の邸宅の一部を構成するものであるかどうかに関しては、調査面積が狭小なため断定に至る積極的な資料を得ることができなかった。今後の周辺地域における調査の進展が強く望まれる次第である。

昭和58年3月25日

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足